

No. 369【2019年8月16日配信】

森山弥七郎と「油川鎖港」(担当:工藤)

こんにちは! 室長の工藤です。



森山弥七郎供養碑

8月3日土曜日、油川の浄満寺で執り行われた「青森開港之祖森山翁並油川城主奥瀬家慰霊祭」に出席してきました。この行事は60年以上も続くもので、私が確認し得たところによると昭和33年(1958)の「第一回青森ねぶた祭」のプログラムに、8月3日に開会式・ねぶたの運行に先がけて「開港の恩人森山弥七郎翁墓前祭」が浄満寺で行われています。

「墓前」というのは、浄満寺の境内にあって現在「森山弥七郎供養碑」と呼んでいる碑が、かつては「墓」と称されていたことによるのでしょう。それで、現在でも一般には「墓前祭」と呼んでいるようです。

さて、森山弥七郎は今から400年ほど前の青森の町づくりに尽力した人物で、つぎのようなエピソードが伝えられています。

「新しい港町を作るにあたり、弘前藩庁は外浜に入港する船はすべてこの新しい港町に着船させることを決めました。こうなると、すでに港町として存在していた油川の港には船の着船ができなくなるのです(以下、これを「油川鎖港」とします)。この方針に断固異を唱えたのが森山弥七郎でしたが、自身の意見が受け入れられなかったので切腹して絶命したのです。そして、油川の人々は森山の思いに感じ入り、碑を建てて祀ったのです。」

このエピソードは、明治40年代には確認できるものですが、「訛伝(間違った言い伝え)」と評価されています。さらに、昭和3年発刊の西田源蔵『油川町誌』でも取り上げられるものの、「採るに足らぬ」と退けます。

ところで、弘前藩庁による青森の町づくりの基本方針のひとつに「商船の外浜着船を青森1か所に限定する」というものがあります。そして、これは森山が担当するものであったと、元禄10年(1697)に青森町年寄が語っています。ただ、実効性に乏しく青森は「衰微」となり、この役目は森山から服部長門守と乾四郎兵衛に交代となったとも言います。この交代劇をほかの記録と突き合わせてみると、交代があったとすれば寛永6年(1629)か同11年が想定でき、記録の信頼性という点からは寛永11年が有力です。これが後に「油川鎖港」というある種の伝承を生んだ背景になるのではないかとみています。

なお、森山の切腹についてはまったく分かりません。ただ、森山は青森の町づくりから外れるとみています。そして、この頃から信頼のおける記録で、森山の足取りがしばらくつかめなくなります。それから四半世紀が過ぎ、寛文元年(1661)8月に青森詰の役人で森山内蔵之助という人物がいます。果して同一人物か…通説に従えば90歳近くになっています。